高安犬物語

戸川幸夫

新潮社

高安犬物語

戸川幸夫

新潮社版

★高安犬物語★

定価 一三〇円

一九五六年六月二十一日 印刷
一九五六年六月二十五日 発行

著者 戸川幸夫
発行者 佐藤亮一
印刷者 曾根盛事
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京三四局代表七一一一(八)
振替東京八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷 扶桑印刷株式会社 製本 新宿加藤製本所

© by Y. TOGAWA 1956. TOKYO Printed in Japan.

目次

高安犬物語……五
熊犬物語……六四
北へ歸る……一〇五
土佐犬物語……一二六
秋田犬物語……一八四

裴

幀

森

白

甫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

高安犬物語

高安犬物語

一

チンは、高安犬としての純血を保っていた最後の犬だった、と私はいまもって信じている。

高安犬というのは山形縣東置賜郡高畠町高安を中心に繁殖した中型の日本犬で、主として番犬や熊獵犬に使われていた。中型の日本犬とはいっても紀州犬やアイヌ犬のようにスマートな、女性的なのと異って、犬張子を思わせるガッチリとした體つきの、戰鬪的な狩獵犬だった。熊を追って幾日も幾日も雪山を彷徨出來る強い耐久力と、相手が斃れるまで喰い下る激しい鬪魂、鼻を捥ぎとるような寒風の中から熊の體臭を嗅ぎわける鋭い感覺——こういった類のない特徵を持った狩獵犬だった。だがその優秀な血も怒濤のように押し寄せてくる垂耳犬の汚れた血で次第に崩されてゆき、昭和の初めごろにはもう高安犬の發祥地である高安附近では、耳は立ち尾は捲いていても、どことなくバタ臭い犬で充滿し、あの美しい古武士のような重みのある高安犬の姿は見られなくなっていた。

當時ここの高等學校の理科に學んでいた私は、純血の高安犬が殘存しているという奇蹟を

信じ、日曜毎に自轉車を驅って縣下の山村僻地を經巡っていた。私が高安犬に強く心を惹かれたのは、一口にいえば〝亡びゆく種族〟への愛惜に外ならない。だが當時の私の氣持は〝愛惜〟という言葉だけでは言い現わし得ない、もっと強い、つきつめられたものを感じていた。この〝種〟を滅してはいけない——と叫びたいような念願だったといえる。

もともと九州に生れ、九州に育った私がこんな遠い東北の高等學校に籍を置くようになったのも動物學、それも東北帝大にだけしかなかった古生物學科を志望していたからである。私は子供のころから動物が好きだった。玩具よりも蜘蛛や百足蟲を欲しがって、ほんにこの子アどぎゃんなッとじゃろか、と祖母を嘆かせていたそうだ。中學生になったころは蛇や蜥蜴をこっそり家の中に持ち込んだり、押入れの中を拾ってきた動物の骨で一ぱいにして兩親を呆れさせたものだった。

生きた動物の好きだった私が〝絶滅した種〟を研究する古生物學に興味を持つようになったのは、科學博物館に勤めていた從兄に負うところが多い。從兄はここで地質學部門を擔當していたのだが、ある夏歸省したおり、中學生の私にいまから何千萬年という昔、地球上をわがもの顔に歩き廻っていた巨大な龍の話をしてくれた。その印象は強く私の腦裏に刻み込まれた。私は小遣を貯めてはそういった參考書を買い集め〝失われたる世界〟に遠く想を走らせるのだった。

私の父はいわゆる政商で、政黨に獻金しては旨い仕事を分けて貰っていた。父の頭を常に

支配しているのは政界がどのように動いて、その結果どの方面の仕事が活潑になるか、ということだけだった。なんちゅうたッちゃあ、男の仕事ぁ政治家ばん。一國の運命ば左右すッとじゃッけんのう――これが父の口癖だった。九州の片田舎の水呑み百姓の伜に生れた父は政治家を志した。だが頼るべき筋も、背景も持たなかった父はまず蓄財することだと考えた。Y製鐵所を振り出しにO商事、そして獨立、どうやら代議士戰に打って出る準備が出來た時にはもう年を取りすぎていた。いまさら陣笠でもあるまいけんの、久雄に望みゃあ、繼がすッたい――こういって中學生の私に精神的な負擔を押しつけた。

卒業間近かになって自分の意思を繼いで政治家への道を進んでくれると思い込んでいた息子から、實は動物學者になりたいのだがと打明けられた時、さすがにがっくりしたようだったが、從兄の口添えもあって、子煩惱な父は不承不承ながら私の志望を許してくれた。しかし、それには條件があって、もし辷ったら來年は父の意志通り文科を受けるということだった。私が親もとを遠く離れたかった理由の一つには、時々、頭をもたげてくる父の政治への執念から逃れてのびのびと暮したかったからでもある。

その時は高安犬のことは勿論、日本犬の知識すらろくになかった。今でこそ日本犬はシェパードやスピッツ同様ごくありふれた犬種になっているが、その頃は立耳捲尾の日本犬の姿を見るのも珍らしく、東京でその絶滅を憂慮した二、三の識者達によって保護會を作ろう上という動きが見えていたに過ぎなかった。

私はどうやら無事に入學する事が出來た。

ある日のこと、土地の新聞に老婆が山犬の群に襲われて、嚙み殺されたというニュースが載った。狼や山犬が人を襲うという話は少年時代愛讀した立川文庫かなんかでは見た記憶があったが、新聞で讀むのは初めてで、それだけに生々しい實感があった。山犬なんてほんとにいるのかな、私は動物學の教師に質してみた。教師は、

「昔はいたらしいが……いまはどうかねえ。豺狼といっても、あれはみな支那の字だから……」

と曖昧に首を捻った。圖書室で調べてもハッキリしなかった。私は博物館の從兄に手紙で訊ねた。折りかえし從兄から、山犬というのは日本產の小型の狼のことで、明治三十八年以來捕えられた記錄がないところから見ると絕滅したと見るべきだろう。君のいう山犬がほんとうの日本狼なら非常に貴重な資料であるばかりでなく、動物學界の定說を覆えす材料なんだが恐らくそれは日本犬の野性化したものに過ぎないのじゃないか、といってきた。

私はその後も新聞に注意を怠らなかったが、山犬のニュースはそれなり斷えてしまった。だが私の山犬への關心——ほんとうに絕滅してしまって、もう一匹も殘ってはいないのだろうか——という絕滅した種への愛惜はだんだんと昂っていった。

私が山犬の話を二度目に耳にしたのは、二學期の初め、山形市の東南に聳える龍山に野外行軍をした時だった。この山は千四百米ばかりだったが、藏王山塊の出城とでもいった嶮し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

い山だった。土坂、岩波、神尾(かんの)など山麓の部落はこのところ毎夜、鷄や山羊が山犬の群に襲われるということだったが、彼らは夜更けてから來るので誰もその正體を認めた者はなかった。私はその後、何度もこれらの部落を訪れて調査したり、捕獲者に懸賞金をかけたりしたが結局得るところはなかった。

その冬南置賜郡の萬世村(ばんせいむら)で山犬が射たれたというニュースが新聞の端に小さく載った事があった。また米澤市内に、明治の頃狼を飼っていたという老人が住んでいると教えてくれた人もあったが、そのいずれもが行って調べてみると野性化した日本犬に過ぎなかった。

「そうさ、やはり日本狼は絶滅してると見るべきだね。なにも山形ばかりじゃなく、よくあッちこッちで山犬が出ただの狼が現われたという話を聞くけどね。それを報告する連中は知識のない獵師や炭燒きなんだから正確さがないんだよ」

正月休みに從兄を訪問して報告すると彼はそういって笑った。結局、私はやはり日本狼の絶滅を認めないわけにはいかなかった。

私に日本犬への眼を開かせてくれたのは學友の尾關だった。三學期に入って間もなく、教室のスチームに當っている私に尾關は話しかけてきた。彼は私が學友會雜誌に掲載した『山形縣下に於ける山犬殘存說の實態』という報告を興味をもって讀んだと語り、

「だが、君は日本犬には興味はねえのかス」

と聞いた。尾關は米澤の大きな釀造家の跡取りだったが、酒造りの家業を嫌って高等學校

の理科にやってきていた。彼の目標は北大の農學部だった。彼が日本犬の愛好家であることを私はこの時はじめて知った。私は、しかしこの頃はまだ犬にはそれほどの興味を持ってはいなかった。

雪國である山形は、三學期は白の世界と化した。好きな山歩きを封じられて退屈していた私は尾關に誘われるままに、ある日、あまり氣乗りしなかったが秋田犬を見に行った。

日本犬というものを意識して見たのはこの時が初めてだった。ポインターやシェパードやその他の優美な外國犬しか知らなかった私はこの重厚な北國の犬の雄大さに打たれた。

「ウーン、こいつあ凄え！」

私は思わず唸った。

歸りの雪道で尾關は日本犬の優秀性について雄辯にしゃべった。私の日本犬への關心はこの時から始まったといえる。日本狼に對する探究慾はいつしか日本犬へと移って行ったのだった。

梅、桃、櫻と一度に咲き出す北國の遲い春がくると私はこんどは日本犬を求めて歩き廻った。山形市を中心として私の犬探しの範圍は郊外から次第に地方へと波紋のように擴がっていった。

「もう君の方が俺より日本犬のこと、ずッと詳しくなったんでねえかス」

尾關は私が手帳に、どこの町で何頭、ここの村に何頭と書き込んで、縣下の日本犬の犬籍

簿を作っているのを見てこういった。

間もなく東京に日本犬保護協會が發足した。私は早速入會した。やがて送られてきた會員名簿で私は山形市内にもう一人、同好者があることを知った。その人は木村屋というパン屋の主人だった。木村屋さんは三十五、六の背の低い、ズングリとした赭ら顔の人で、元はこのパン屋の店員だったが、その働き振りが先代の眼にとまって養子になったのだということだった。だが私の見たところでは凡そ商人に似つかわしくなかった。彼の部屋は彼の商賣とは縁のない難かしい本でぎっしりと埋っていて、彼がなかなかの勉強家だということが判った。右翼や左翼の連中とも往來があって、警察からも眼をつけられている人物だという噂もあったが、彼は私たち——私と尾關——にはそういう氣配は少しも見せなかった。私たちはただ日本犬を中心として木村屋さんと親しくなっていった。

夏休みが近づいたころ、尾關が私と木村屋さんを米澤に行ってみないかと誘った。

「米澤の傍に高畠どいうどご、あんのよう。おらん達、子供ン時分にゃ高安犬のええのがなんぼもいだもんだ。いまあ純粋な奴は絶滅してなくなったべげんど、奥の方サ行ってみッとええのがあッかもしんねエからよ」

と彼はいった。高安犬——それがどんな犬だか私は知らなかったが、絶滅に瀕している犬種という言葉は私の胸に強く響いた。

私たちは灼けつくような炎天下を何度も米澤に出かけた。が、その甲斐はなかった。僅か

に最後の行の時、萬世街道の茶屋で一頭と二井宿町の銀行で一頭、純粋に近い高安犬を見つけ得たに過ぎなかった。しかしその二頭とももうよぼよぼの老犬で仔犬を取る術もなかった。

歸りの汽車の中で木村屋さんと尾關とは、

「やッぱりいまあ、高安は駄目になったんだなア。純粋な血なんて殘っていッこあんめえちャ」

と犬探しを中止するといい出した。だが私は一人でも續けようと强く決心した。十數年前まで殘っていた純粋の血はきっとどこかの奥にまだ殘存しているに違いない。そう信じたかった。

中型犬であり乍ら秋田犬のようにどっしりとした落ちつきを見せた重厚な風貌が、それは今日はじめて見たよぼよぼの老犬にさえ十分にうかがわれ、私に諦めきれない愛惜を抱かせたからに違いなかった。

夏休みも終り、二學期が始まった。もう尾關も木村屋さんも一緒に來なかったが、私は根氣よく犬探しを續けた。

偶然、私は二井宿の木樵から和田村の奥にいい地犬——高安犬のことを土地の人たちはこう呼んでいた——がいると聞かされた。木樵はしかしその犬は獵師の犬だからちょっとやそっとでは手放さないだろうと言い足した。手に入れるとか入れないということは第二の問題だった。若い優秀な高安犬が見られるという昂奮で、私は夢中になって自轉車のペダルを踏

んだ。

二

和田村は吾妻連峯が藏王山塊と出合う鞍部の山懷にがっしりと抱き込まれた山村だった。村からは晴れた日には左に遠く雄大な飯豐山が眺められ、吾妻の尾根がこれに續いていた。その尾根は栗子山、駒ヶ岳、豪士山となって和田村の背後に迫り、右手は野猿が群棲する稻子峠が龍ヶ岳の肩に連なり、その向うに藏王、龍、雁戸の峯々、遠くに朝日連峯が磨ぎすましたような佇いを見せていた。

山懷に抱かれたというよりは山脈に突き刺さったような、細長いこの村は田も畑も狹く、どの農家も疊のない黑ずんだ板敷の部屋でうす暗く、低い、冷え冷えとした軒が陰鬱に娘を賣る縣の悲しみを滲みこませていた。

ここでは雪は早くきて遲くまで殘った。そして深かった。

村人たちは殆どが半農半獵で、雪に閉じ込められた長い期間を熊を追い、狐を狩り、兎を捕えて暮していた。

二學期に入ったばかりで殘暑はまだ酷しかったが、この邊りは山が迫っている故か、それほどには感ぜられなかった。

「オーイ、このあだりサ、地犬、えねエがス？」

畦に遊ぶ兒童たちを見つけては聲を掛けたが、都會人を見たことのない彼らはただポカンと私を見詰めるだけだった。畑にいる百姓に訊ねても彼らは犬などには少しも關心を持っていなかった。

「地犬かあ、いっぱいいんぜス」

とこともなげにいうのもあれば、親切に、

「ホだなあ、菊ンどこサ居ンでねエがな。なアれ、菊の子供だらよぐ引ッ張ッてんぜえス」

と大聲で隣りの畑に聞いてくれる者もあったが、いずれにしても信頼のおける返事はなかった。

ぬかる路を自轉車を押したり、擔いだりでふうふういい乍らあっちの外れ、こっちの片隅の農家を訪れて何頭かの犬を見て廻ったが、それはどれも私が米澤や高畠で見た以上のものではなかった。

やっぱり話だけか――いつものこととは云え、氣負いこんだあとの疲れで私は力なく米澤へ自轉車を走らせた。

陽は沈もうとして駒ヶ岳から豪士山にかけて湧き上っている入道雲の頂をあかあかと染めていた。

しばらく行くと田ン圃道を向うから、夕陽をカッと一ぱいに浴びて獵師風の長身の男が一頭の白い犬を連れてやってくるのに出遇った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton